

野村かつ子さん●IOCU(国際消費者機構)名誉顧問

## 市民運動は「終わりなき闘い」です

6月29日、世界153カ国・地域の女性千人にノーベル平和賞を授与するための「2005年ノーベル平和賞に女性1000人」のプロジェクトにノミネートされました。これは、平和や人権尊重のために活動している女性たちの象徴として千人を顕彰しようというもので、日本からの候補者は6人。その1人として推挙された野村かつ子さんに、これまでの活動や市民運動についての考えを伺いました。



のむら かつこ  
1910年京都市生まれ。31年同志社女子専門学校英文科卒業。41年大学文学部神学科学卒業。協同組合運動を経て、日本生活協同組合、婦人職業組合、日本消費者連盟、海外市民活動センターなどの創設に活躍。これまで、市川房江基金奨励賞、東京弁護士会「人権賞」、韓国「イェルガ賞」、農政ジャーナリストの会賞を受賞。著書に『アメリカの消費者運動』、訳書に『アメリカは燃えている』(ラルフ・ネーダー著、共訳)ほか多数。

## 「一家が総出で働いているのになぜ貧しいのか」という素朴な疑問が原点

「2005年ノーベル平和賞に女性1000人」プロジェクトにノミネート、おめでとございます。

野村 候補者にノミネートされていることは、実は1年ほど前に知らされていたんです。しかし、正式に発表される2005年6月29日の夜12時を過ぎるまで誰にも話してはいけない、と言われていました。1年間黙っているのはしんどかったですよ。とはいえ、格別騒ぎもしないし喜びもしません。織物に縦糸と横糸がありますね、その一

つの結節点、それが野村かつ子さんです。個人としてあるのではない。全体の中の野村かつ子であり、しかも野村かつ子である。いわば、これは日本の市民運動全体に対して、またこうした活動を支え導いてくださった全ての人々の代表として褒美をいただいたと受け止めています。

「ノーベル平和賞に1000人の女性を」プロジェクトとは壮大ですね。

野村 2003年、平和のために尽力する女性たちが公に認知されるべきであるという考えでプロジェクトが開始され、世界中で2500余人が候補に挙がったそうですが、持続可能で誠実な方法を用

いていること、長期間の活動であること、調停において中立的な立場であること、幅広いネットワークを構築していることなどを基準に千人に絞られたと聞いています。つまり千人という数は象徴的なもので、平和と正義のために努力しているすべての女性に対する顕彰といえるでしょう。10月にノーベル財団が実際にどう判断するかわかりませんが、国際的な関心を喚起することで、人権を守るさまざまな活動も「平和」運動の一環なんだというように、「平和」の概念を広げることにも役立つと思いますよ。

——半世紀以上にわたって、さまざまな

社会運動に取り組まれてきたことが評価されてのノミネート。そもそも、こうした活動に携わるようになったきっかけは。

野村 社会のあり方に疑問を持ったのは、まだほんの子どもの頃です。生家は西陣で織物の道具を売る小さな店を営んでいて、私は小さな時から店の仕事をよく手伝っていました。それで、月末に集金に回るのが、わずかな支払いがいっぱんにできない家が多い。一家が総出で働いているのになぜだろうと、子ども心にも不思議でした。

## 活動や考え方の基にあるのはキリスト教信仰

——京都府立京都第一高等女学校(現・鴨沂高校)を経て同志社女子専門学校英文科に進めますが、どんな学生生活を送られたのでしょうか。

野村 同志社女専に進学した頃には、不公平な世の中に対する疑問はだんだん大きくなっていった。英文科なのに英語の勉強は少ししないで、授業をさぼっては、同志社大学で当時開かれていた賀川豊彦や中島重教授ら、社会変革を唱える学者たちの野外講義を聴きに行ってい

ました。ここで受けた講義が、私の基礎を作ってくれたと思います。もう一つ、強く印象に残っている授業があります。哲学の時間に、京都大学を卒業したばかりの戸坂潤さんが講師でやってきて、開口一番「学者は社会を解釈し、語る。しかし問題の要はいかに変革するか」と言ったんですね。この言葉は私の胸に深く刺さり、後の人生の柱となりました。戸坂潤さんは、その授業の後すぐ東京に出て治安維持法で逮捕され、終戦間際に獄中で亡くなりました。たった一度きりの授業でしたが、今も、そのときの先生の姿をありありと思い出します。

——その後、神学科に進学されますが、動機は何だったのですか。

野村 当時、共産主義を信奉する人々も貧しい人々を何とかしようと社会運動をしていました。私も貧しい人々のお役に立つことをしたいと考えていたわけですが、では、共産主義に基づく社会運動と信仰に基づいて私がやりたい運動とはどこが違うのか、それを知りたいと思っただけです。神学科に入って大塚節治先生から読めと勧められたのが、カール・バルトの『命令と秩序』。カール・バル

トの神学は「人間は瞬間、瞬間に裁かれている」という徹底的な自己否定に基づく神学です。私は、今回この賞にノミネートされたわけですが、神様でもないのに社会のお役に立つようなことをしたと満足感を持つことはいけないし、まして、そのことについて話をして自分はえらい人間だと思わせることは許されません。もちろん、黙っていたとしても、「自分は黙ってやっている」と思うからそれはいけない。それがバルトの言う「瞬間、瞬間裁かれている」ということです。では、完全に自己否定をした後に次にどう一歩が踏み出せるか。そこがまだ分かりません。まだまだ勉強だと思っています。

——すべての行動の基本には信仰がある。

野村 いま私は毎朝4時に起きて1時間半ほど歩き、そして体操をしています。もうちよつと寝ていたいけれど、「いやいや、いけない」と思う。「いけない」という声があるのです。道徳ではなく、何か第三者から「いけない」という声が聞こえる。自分の体は自分のものであって自分のものでないのだから、健康でなくすることは許されないと。こうした気持ち

ちを信仰というもののなかと、自分でも  
問い直しているところですよ。

**自分で調べ、ぶっかっつてくっくっどい、  
方向性が見えてくる**

——同志社生活で一番心に残っているこ  
とは何でしょう。

**野村** 同志社の正門を入ってすぐのところ  
に良心碑がありますが、同志社で印象  
に残っているのは「良心を手腕に運用す  
る」という言葉。人は、手や足を血みど  
ろ、泥だらけにして働いている人には共  
感しますが、高いところから言っても言  
葉は伝わらない。自ら泥の中に飛び込ん  
でいく人材にこそなれ、という教えです。  
——大学を卒業後、その教えを実践され  
ていくわけですね。

**野村** 実践しなければ嘘だから。また、  
そこで教えられずから。大学を卒業し  
て最初に就職したのが日本労働組合総評  
議会でした。折しも三池闘争の真つ最中。  
それで、当時議長だった太田 薫さんか  
ら「いま三池で闘争をやっているから行  
つてこい」と。三池に行くと、主婦なん  
かも家にじつとしていないで旦那と一緒  
に戦っている。そこで、おかみさんたち  
にぼろくそに言われましてね。「私は大

学を出た人間だ」とちよつと天狗になつ  
ていたんですが、そういう虚栄心をへし  
折られたんです。学があるとかないとか  
が社会を変えていく原動力にはならない  
ということを思い知らされました。頭で  
いくら考えていてもだめ、何事にも体当  
たりでぶつかつていかなかつたら道は開  
けない。この経験がそれからの生き方を  
決定づけました。

——さらにその後、日本消費者連盟の創  
設、海外市民活動情報センターの創設、  
IOCU（国際消費者機構）顧問に就任  
と、活発な活動を展開されてきました。  
どのようにフィールドを広げていかれた  
のでしょうか。

**野村** 根っこにあるのはよい世の中にし  
たいという思いですが、では具体的にど  
ういう方向に進むか、何に取り組むか、  
最初から計画や設計があつた訳ではあり  
ません。次に何をすればいいかなんて誰  
も教えてくれない。新聞を読んだり、情  
報を調べたりしているうちに、自分の知  
らないこと、疑問に思うことが出てくる  
でしょ。そういうことを調べることから  
すべて始まっているんです。たとえば71  
年に、ニューヨーク市消費者保護庁のべ

ス・マイヤーという人が「集団訴訟法」  
を提案した。これは新聞で知つたのです  
が、初めて聞く言葉です。「集団訴訟法」  
とはどういうものなのか。消費者保護庁  
というのは何をするとするところなのか。それ  
で、ベス・マイヤーさんに手紙を出して  
資料を送ってもらい、少しお金ができる  
とアメリカへ行つて、直に話を聞いた。  
英語がうまくなくても、聞きたい、伝え  
たいという気持ちがあれば自然に通じる  
ものです。こうして、新しい分野を一つ  
ひとつ開拓していったのです。

——人との出逢いも活動を飛躍させる原  
動力になったんですね。

**野村** ええ、さまざまな人との出逢いを  
通して視点を大きく持つことができました。  
たとえば、ラルフ・ネーダー氏。70  
年当時、彼は世界をリードする消費者運  
動の旗手的存在で、ジャーナリストです  
ら彼をつかまえるのは難しかったのです  
が、私は彼の事務所を直接訪ねて臆する  
ことなく、「日本の消費者運動を激賞す  
るために来日してもらいたい」と訴えま  
した。そうすると翌日、OKの返事が来  
たのです。その来日の折、ネーダー氏  
は「これまでの消費者運動は、ホットド

**勉強とは、自分の知らない世界を  
切り開くということ**

——日本の大学教育に対してのご意見  
を。

**野村** 今の大学の先生は本を読んで知識  
を提供しているだけ。だから人の心を動  
かさないのでしょ。もつと学生さんに勉強  
しようという気持ちを起こさせないとだ  
め。私はハーバード大学の夏期学校に行  
つたことがあるんです。皆がどうしてハ  
ーバード、ハーバードと言うのか疑問に  
思つて、65歳の時、実際にその授業を受  
けにいきました。ここでは、授業が1時  
間とすると最初の30分間ニューヨークの  
スラムのスライドを見せる。残りの30分  
間、そのスラムを改革するにはどうい  
う方法があるか、10項目を挙げて書かせ  
る、そういう授業をしていました。現実  
の社会と直結した問題を取り上げて学生  
に考えさせる。このように大学の先生自  
身、もつと疑問をもつて勉強しないと。  
そして、実践に基づいて自分が得た本物  
の知識を学生さんに与えてほしいです  
ね。

——今の学生に望まれることは。  
**野村** 学校の勉強だけが勉強ではありま

せん。勉強するということは、自分の知  
らない世界を切り開いて覗いて見るとい  
うこと。ですから、間違っているところ  
はないかと絶えず自分を磨きますね。勉  
強は先生に教えてもらうのではなく、自  
分で徹底的にやるといふことが大切で  
す。教えてもらったから全部疑問が解け  
るといふものではないですよ。自分でぶ  
つかつていかなかつたら何も身についま  
せん。学生さんに対して、ああしろ、  
こうしろと命令するのは間違ひ。自分ら  
しい自分しかない方法があるはずだか  
ら、それを見つけて自分で考え、自分の  
道を歩んでいってもらいたいですね。  
——これから、どういうことをなさつて  
いこうと考えておられますか。

**野村** 私が何時どうなつても、他の人が  
見て分かるように資料の整理をしていま  
す。ここには市民運動を含め、さまざま  
な資料が揃っています。勉強したいとい  
う人があれば是非、私の家に来て集めた  
資料を活用してほしいですね。よいこと  
をするために努力をしなければ。でない  
と日本は本当に駄目になりますよ。

（聞き手・井上陽子、6月30日東京・八  
幡山の野村さん宅）

**野村** 一言で言えば「終わりなき闘い」。  
一つの問題が解決しても、また新たな問  
題が起こってきます。そうした問題が  
次々に起こつてくることに對して失望せ  
ず、むしろファイトを湧かせて挑んでい  
く。それが私の生き方であり、その持統  
性こそ市民運動の力だと思ひます。

秦 恒平さん●作家

## 日本ペンクラブ電子文藝館で 文学を取り巻く状況を変革

秦さんは、日本ペンクラブの理事として、2000余人の会員の作品および日本近代文学史上の名作をインターネット上に展覧する「日本ペンクラブ電子文藝館」を立ち上げ、中心になって活動されてきました。その意図するところは果たしたのでしょうか。新しい出版形態として注目を集めている「湖の本」活動の趣旨と併せて、お話を伺いました。



はた こうへい  
1935年京都市生まれ。58年大学文学部卒業。60年大学院文学研究科修士課程中退。出版社に勤務していた69年、小説『清経入水』で太宰治文学賞受賞。代表作の『慈子』『みごもりの湖』をはじめ著書は約100冊。86年から読者へ自著を直接届ける『秦恒平・湖の本』を開始。91～96年、東京工業大学工学部教授。97年～05年5月、日本ペンクラブ理事。

### 文学作品、文芸作品を通して 日本の近代史が一望できるように

——「電子文藝館」を作られた趣旨をお聞かせください。

秦 日本ペンクラブというのは文筆家からなる、国際ペン憲章に則った世界平和と言論表現の自由を守るための思想団体です。ですから、たとえば「個人情報保護法」反対だとか、憲法や社会的な問題に対して声明を出します。それで、単に声明を出すための団体だと思っている人も多い。そうではなくて、文学、文芸の仕事をしていることが力になっている思想団体なのだということを知ってもらい

たいと、2000人の各会員がどんな仕事をしているのかを展覧することにしたのです。日本ペンクラブの影響力、感動力というのは、一人ひとりの構成員の文学的な力によって発揮されるものだから。

——古い作品も数多く展示されています。これはどういう理由からですか。

秦 亡くなった作家の中には優れた作家がいっぱいいる。たとえば谷崎潤一郎も会員だったわけですが、こうした物故会員の作品も取り上げていこう。さらに、もう名前も忘れられた作家、文学者の中にもその時に非常によい仕事をしていた

載せられる。それで、作品の取捨選択から、昔の古い作品をスキヤナーで取り込み、校正して展示するまでを自分の責任で行いました。それが3年半で約600作。完全なボランティアです。好きだから、やらなければいけないと思うから、自分の時間を全部犠牲にしてもやれたんです。家内は、「あなたいま一番身にあつた仕事をしているわね」って言います。長年の読書体験が全部反映できるわけですから。

——お陰で、私たちも楽しみにさまざまな作品を読めるようになりました。

秦 コンピュータでものを読むような若い人たちに、文芸との出会いの機会を提供するというのも、もう一つのねらいでした。読者に文学を楽しんでもらうことが大切なので、一定のルールのもと、難しい漢字は可能な限り新字に変えるといった工夫はしています。

### 意表をつく質問で学生の本音を引き出す

——若い人たちといえば、東京工業大学で4年半教壇に立たれたわけですが、どのような授業をされたのでしょうか。

秦 1学年がせいぜい1100人くらいという学生数の大学で、1000人くらいが登録してね。理工系の学生にど

うして文学の授業がそんなに人気があったのか。文学にしか関心がない文学者、経済にしか関心がない経済人、こうした幅の狭い人をT型人間というのですが、だからせめてπ型人間、つまり本当にやりたいこととそれを支える全然別の関心とを持つている人間にならないといけない。彼らはそれに気づいているからこそ、文学というもう一つの支えを求めらるんです。そんな学生たちに、いかに面白く文学を教えるか。私は、自分で考えさせる、書かせることに徹しました。それも、お前たちはながら勉強ができるんだから、私の授業を聞きながら書けと。出席簿代わりに、帰りがけには提出させた。では、何を書かせたか。たとえば「寂しいか」「神は必要か」とか、意表をつくような、今まで考えたこともないようなことをテーマにする。ある時は、漱石の小説『こころ』を題材に、「ここに出てくる先生はいつたい何歳くらいで自殺したか」と問う。そして、そう推理する理由を論証させる。東工大の学生は論証せよといえど一発、すぐ引つかかっていますから(笑)。それはもう、さまざまな答えが出来ます。それを全部読んで、次の授業の時に面白いもの、代表的なものを選んで出

人がいくらもいる。その人たちを忘れさせるようなことがあつてはならない。だから、ペンクラブの会員かどうかという垣根を取り払い、日本の近代の優れた文学作品やその時代の問題作をしつかり掘り起こして発信しよう。さらに文藝館展観の文学、文芸作品を通して日本の近代史が一望できるようにしよう。一番古い人は散切り歌舞伎の河竹黙阿弥。もちろん福沢諭吉や新島襄も入っています。

——ほとんどお一人で電子化の作業を進められたと伺いました。

秦 私はほとんどの作品を読んでいますから、優れたものであれば自信を持ってす。そうすると、自分はどういうことを考えていたけれど、隣のやつはこういうことを考えているということに気がつくんですよ。それが聞きたくて皆出席する。というのは、仲良くしているようでいて、一人ひとりみな孤独なんです。だから、狂っちゃう子や自殺する子も出てくる。それで、自分の本心を出させようと思つた。「いまの学生は書きませんよ」と皆に言われたのですが、最終的に4年間で原稿用紙にして3万5000枚、350枚の本にして100冊分の量を書かせることに成功しました。言い換えれば、それだけの泥を学生に吐かせたということです。

——学生が本音をさらけ出したのは、なぜだとお考えですか。

秦 文学を真面目にやっている人だという信頼でしょう。彼らは「秦さんには親にも友だちにも言わないようなことを書いて出した」と言いますね。だから、学生と付き合ったのはたつた1年か2年、それも10年以上経っているのに、今でもしよつちゅう結婚式に呼び出されます。

### マス・プロの出版状況に 一石を投じた「湖の本」

——自著を読者に直接届ける「湖の本」

を20年続けておられますが、始められた動機は何ですか。

秦 私は、文学というのとはともどもミニ・プロ、ミニ・セールが本来の姿なんだと考えています。ところが、昭和の後半になるとマス・プロ、マス・セールになつてきた。昔は編集者、出版社とは、作品の質を絆として結ばれていたんです。「秦さんいい作品をください、いい作品だったらいつでも本にします」と。とにかく編集者がいいものを作りたいという気持ちを持つていた。ところがバブルの時代になつて、編集者にとつて何が一番大事かという価値観の順位が変化し、売れさえすればよく、中身はその次だとなつた。しかし、そんな形で文学がいいものになる訳はない。しかも、出した本がすぐ手に入らなくなつてしまふ。10年かかつて書いた本が1年も経たないうちに絶版になつたのでは、私自身も作品も、その作品を読みたいと思つてくれる読者もかわいそうだ。そういう文学環境は革新されなくてはいけない。それで、自分でやれることはしようと始めたんです。

——作家自身による出版という方法は、いま多くの作家たちに広まつています。

## バックボーンにあるのは、京都の文化

——同社での思い出を。

秦 一番の思い出は家内と出逢つたことかな。家内と出逢うために同社社にいたようなものですね(笑)。もちろん、同社社では素晴らしい先生に出逢えませんでした、その先生方から受けたものは私の仕事に生きています。その感謝は大きいですね。たとえば、南波浩先生。「物語」というのはいつたいていどういふものかということを教えていただいた。それから社会学の伊藤先生。この先生からは、京都言葉で言うところの「位取り」というものを教えてもらった。人と人が出逢つたときはそこに必ず一種微妙な心理的、社会的な力関係が生じます。背が高い低いとか、どこの学校を出たとか、お金があるとか、人間はそういう社会的な位取りをする。そういう意味で、これは私の仕事にもものすごく影響を与えた。つまり、同社社で私はもうただけのものではもつたといえます。ですが、大学時代に得た知識というのはただの根。私がずっとサラリーマンでいたら、根のままでつたでしょう。ものを書こう、作ろうとしたから、その根から芽がいつぱい噴いてきた

秦 私が「湖の本」を始めた時、2、3冊も売れば上等だと皆に言われました。しかしその時、私はできたら楠正成のようになりたいと。赤坂(阪)城にたつてこもつて奇襲戦法で敵の大群を引きつけ、仮に赤坂城が潰れても千早城へ転じてできるだけ長い間頑張りよう。そうすれば京都の鎌倉探題、つまり大手資本が牛耳る出版社会が少し変わってくるだろうと思つたんです。事実、変わつてきたわけですよ。当時は、言つてみれば反逆浪人の傘張りみたいなもので、第一線のアップデートな出版状況からすると一番後ろについたような形でした。ところがいつの間にか最先端に躍り出た。皆黙つてはいるけれど、意識はしていますよ。

——「湖の本」の活動も既に20年。それを支えたものは何でしょう。

秦 絶対に必要なのは活動を支持してくれる読者。出せば必ず買つてくれる少数精鋭の読者が、国内外にいるからこそ続けてこられた。なかにはこの先10年分くらいを前納してくれている人もいます。すでに85冊出しましたが、100冊でも大丈夫でしょう。どんなに志が高かろうと、本の費用を回収できないのであればそれは道楽。道楽ではプロとは言えない

んですよ。そして、社会的、文化的にそういう根をたくさん持っているのは、やはり京都。だから、私にとつて何が一番かと問われれば、文学上の谷崎潤一郎先生とか志賀直哉先生と言わず京都と言んです。

——学術的な土壌は京都にあると。

秦 「京の昼寝」という言葉をご存じですか。京都で生まれ育つた人は空の色や風の音や山の色彩、香りや物音、諸々を何の意識もなく身につけている。だから昼寝をしても分かることがあるという意味です。源氏物語にしても、京都の氣候風土が頭の中に入つているから、注釈書がなくても光源氏の世界を読みとれる。骨董や建物、仏像にしても、自然にいいものに触れる機会が多いんです。私に育つたところは古美術の街として知られる新門前通り。骨董屋のショウウィンドーが私の美術館でした。ガラスに顔をくつつけてのぞくから、店の主人に「あんなの鼻の油が付いてかなわん」とよく叱られたものです。小学校6年生の時から裏千家の茶の湯を習い始め、高校時代には人に教えていました。美術館や博物館で美術を見るよりずっと先に、新門前や古門前で怪しげなものもいつぱい混

し、かつ自由とも言えない。読者の支えがあるからやつていける自由なんです。その読者と自分を結んでいるのは作品の質。わがままな自由じゃないんですよ。——さらに、2000年にはHPの一郭を開放し、e-Library「湖の本」を創刊されましたね。

秦 私自身の電子化雑誌を作つて、そこへ私が選んだいろんな人の文学作品を掲載しています。もう今、2000作くらい入つているんじゃないかな。何よりもインターネット本を手がけようとしたのは、質的なものが量的なりツチなものに駆逐されていくという出版環境に対する強い批判があつたから。インターネットによる文学環境が広がることで、紙の本の出版体質がより健全化していけばいいなと思つています。ただし誰でも自由に、しかもただ同然で自分の作品を発表できるとなると、書きつ放しの垂れ流し、単なる自己満足のひどいのも出てくる。それで、ある程度力のある作家が編集機能を持つて原稿を取捨選択する必要があるんじゃないか。それが、自分の責任編集の文学雑誌を作つている理由なんです。

ざつている美術を見、それから茶を通して美術、文化、映像と入つていった。

ですから、私のバックボーンにあるのは京都、それから日本の歴史ですね。現代というのは伝統の最先頭で沸騰している存在。歴史という下地がなければただの現在になるわけですよ。京都というのは長い歴史の中で最も優れたものを発信しうる街だったのだけれど、今は全国的価値観の発信場所ではなくなつて、単なる地方都市になつてしまつた。京の町衆も京の知識人も小さくなつてしまつていふ。そういう京都的な価値観が小さくなるのが政治も悪くするし、芸術も悪くするということになつてきたと思います。

——これからの抱負をお聞かせください。秦 私が毎日HPに公開している日記には、各地の女性からラブレターがいつぱい来ます。顔も知らない者同志がメールのやりとりでつながつていて、そういう電子化時代の現代小説を書いてみたい。谷崎が最晩年に『癡癡老人日記』というのを書いたように、電子時代の「癡癡老人日記」を書きたいと思つています。

(聞き手・井上陽子、6月17日東京會館)